

十神山



会報 安来節

YASU GI BUSHI

発行所 安来節保存会

〒692-0064
島根県安来市古川町 534
TEL 0854-28-9988
FAX 0854-28-9393
http://www.y-hozon.com/
E-mail:admin@y-hozon.com

名人位を拜命して



名人 鼓
矢倉哲郎
(尾高支部)

平成二十八年一月十日、安来節保存会から栄ある鼓名人に推挙いただきました。これも偏に会長様はじめ諸先生方のご恩情又皆様方の絶大なる御支援御協力のおかげと深く感謝申し上げますと共にその重責に身の引締まる思いを致しております。

私の安来節の原点は、銭太鼓です。銭太鼓を上手く打つ為にはまず唄を理解する必要がありますと感じ、昭和五十一年、縁あつて尾高支部に入会させて頂きました。初めは唄から勉強し五十二年の審査会で二級の資格を取得させて頂きました。その後、銭太鼓と唄に取組んでおりましたところ当時の支部長西村功先生の勧めで

どじょうすくい一筋に



名人 踊
一宇川 勤
(本部道場)

新春を迎えた安来節保存会唄い初め会の席上にて最高位の名人に推挙して頂き、誠に身に余る光栄に感謝致しますとともにこの身に重責を受け止めています。

これも偏に師匠、諸先輩方の皆様のご指導ご鞭撻の賜物と深く感謝を致しております。

昭和五十五年丸瀬一宇師匠に巡り会い、どじょうすくいで出合えた事で私の人生は一変しました。それ以来、私ほどじょうすくいで掬われてしまいました。「よーし、今度は世界中のどじょうすくいを全部掬ってやる」とどじょうすくい一筋に頑張つ

鼓にも挑戦する事になりました。五十二年当時は尾高支部には鼓をされている方が不在だったので、境港東支部の二代目砂川清(浜田雪美)先生に基礎からとても丁寧に分かりやすく、ご指導頂きました。そして、先生に教えて頂いた事を尾高支部で実践させて頂くようになりました。

尾高支部では、鼓奏者が私一人でしたので稽古の時は一人で全員の伴奏をさせて頂きました。多人数を連続して打たせて頂く事となり体力的には至難の業でしたが、今思えばこの事が後に大いに良い結果を生んだものと確信しております。また、後年には故初代砂川清先生にもご指導頂き大変貴重な勉強をさせて頂きました。両砂川清先生のご厚情には、誠に感謝に堪えません。心から厚く御礼申し上げます。

安来節の鼓は一人で大小二つの鼓を持つのが特徴で三味線と間合いを取りながら、曲全体に重みや格闘を与え、唄を一段と素晴らしいものにします。「唄」「三味線」「鼓」の三位一体で表現するこの

新名人に聞く

てきました。習い始めて一ヶ月程で師匠に米子の皆生温泉の森芸能社に連れられ、約八年間ほとんど毎晩四、五回、鼓とどじょうすくいで旅館の舞台上がりました。師匠には舞台のマナーや「あそこはこうしてあして」と少しでも上達するように助言をして頂きました。

師範になつてからは師匠の許可を頂き、大阪、名古屋、東京と教室を開き、約二十年近く一人でも多くの安来節愛好者と思ひ電車を乗り継ぎ教室に通い続けました。会員もなかなか増えず、増えれば減りの繰り返しでした。

平成十年には、本格的に安来節をやるならと現在の安来市のさぎの湯温泉近くに住まいを構え、どじょうすくい体験道場を開きました。ただただ一生懸命にどじょうすくい一筋に三十余年走り続けて来ました。

数多くの国内及び海外公演にも出演させて頂き、貴重な経験をさせて頂きました。これからは私が歩んで来た貴重な経

安来節の魅力の後世に伝えるべく自らも研鑽を積み、更なる発展と保存に努力したいと考えております。皆様方の変わらぬご支援、ご鞭撻を賜りますよう心からお願ひ申し上げます。

プロフィール

生年月日 昭和十九年一月二十八日(七十二歳)

保存会役職 資格審査員

入会年月日 昭和五十一年十月入会

活動記録

現在 三十五年間毎年崎津校区敬老会出演 老人福祉施設慰問多数 邦楽演奏会に出場多数

その他 韓国での日韓親善演奏会出場二回 中国上海万国博での出演 民謡民舞全国大会出場三位入賞

優勝大会での入賞歴 師範・鼓の部

優勝三回(昭和五十八年、五十九年、六十年)

座右の銘 継続は力なり

験を生かし、安来節保存会発展のため、そして後継者育成のために努力して行きたいと思ひます。

これからも今まで以上に師匠、諸先輩方の皆様のご指導ご鞭撻の程、よろしくお願ひ申し上げます。

プロフィール

生年月日 昭和二十三年九月二十一日(六十七歳)

保存会役職 資格審査員

入会年月日 昭和五十六年五月入会

活動記録

現在 地元をはじめ東京・大阪等の教室にて指導

その他 地方公演や海外公演にも多数出演 多数芸能人への体験指導 マスコミを通じ全国への発信

優勝大会での入賞歴 師範・踊の部

優勝三回(平成三年、四年、五年)

幻の手旗信号

— 中海を渡った米相場 —

並河健蔵

明治時代の中頃の安来の港にかかわる逸話を、初老の人の話として聞いたことがある。

その頃、安来の米問屋や精米所は、境港に寄港する船舶から得る大阪の米相場の新しい情報を逸早く知るために、対岸の弓が浜から安来港の波止場に向かつて、手旗信号で伝えてもらったという。それまでは境港から弓が浜を東へ馬を走らせて、米子を通ぎ島田をへて伝えたものだが、手旗信号での伝達が遙かに早かったというのだ。さらにつけ加えるとこの手段を使った精米業者は商売が大いに繁盛し、馬を走らせた業者は遅れをとって、商売がウマくはいけなくなつたという「落ち」がついている。果たしてこの逸話は事実であったのかどうか検証することにする。

明治初期の頃から安来米は、大阪方面では一段と評価が高まつて来た。篤農家・広田亀治が育成した新品種「亀治」が奨励されたことや、この普及に耕作改良、品質管理の徹底が励行されたことなどによって大阪市場で好評であった。出雲地方の産米の七、八割は、この「亀治」米であつたという。

精米業者はそれまでは玄米を移出していたが、明治二十年代には精米により付加価値を高めた精白米を移出するに至つた。当時の模様を唄った字余りの安来節の歌詞がある。

〜都百万賑わうかまど
炊ぐお米のその中に
値段安来の精米は
色が白くて味よゆうて
高い評判十神山
山ほど注文引き受けて
汽車や汽船に積み込んで
阪神登り

さて安来港は松江・松平藩の時代から和鉄・米・生糸をはじめ多くの産物の積出港として栄えてきたが、明治十九年に大阪商船の阪鶴丸が定期的寄港することに付随して、同二十一年には波止場が竣工した。これは延長一六メートル、先端には灯台が設置されたもので、積出港と

しての面目躍如たるものであつた。しかし長い突堤であるにしても、その先端から弓が浜への距離は、遙かに四キロはあつたらう。果たしてその間を手旗信号で米の相場を正確に伝えることが可能であつたのか。晴天、無風など絶好の気象条件が整つたとしても、肉眼ではとてもとてつとも。ところが平成二十五年二月十八日付の毎日新聞の第一面下のコラム「余録」に注目すべき次の記事がのつていた。

「天下の台所」といわれた大阪にコメの取引をする堂島米会所が開設されたのは、江戸時代の享保十五年(一七三〇)のこと。全国から年貢米が集まる堂島での売買でコメの相場が決まつた。値段は手旗信号で各地に届き、岡山には十数分で伝わつたという。当時、最先端の情報伝達ツールだったのだから。(以下略)

さらによく調べると、大阪の米相場の情報が飛脚によって一日遅れて滋賀の天津へ伝えられていたのが、旗振り通信が活用されるようになった江戸時代後期(一八四〇年)以降では、その日のうちに伝達されるようになった。

この史実は米相場を伝える手段として、手旗が使用されたことを証明してはいるが、そうかといって安来港で使われたとは必ずしもいえない所だ。そこでふと頭に浮かんだのは、その逸話を語つた初老の人は精米業者の出身であつたことに気付いた。彼はすでに堂島の米相場の伝達模様を知つていて、自ら創作したのではないか。彼が本当に言いたかつたのは、①珍しく長い突堤が完成したことを誇張したかつた。②また商売の要諦は正確で新しい情報は誰よりも早く手に入れることだ。などを説きたかつたのではないか。

着流しの壞手、さんばら髪で眼光は鋭く、幾分ニヒル容貌で町内を行く、あの初老の姿が何とも懐かしく思ひ出されるのだ。



私と安来節



安来節に感謝



唄 准名人
野々村府美枝
(本部道場)

この度、唄准名人の昇格に当たりまして、安来節保存会会長 近藤宏樹様はじめ沢山の方々から祝福して頂き、感謝で一杯です。紙面をお借りしてお礼を申し上げます。

私が長い間、安来節を唄い続けて来られたのも安来節を理解して頂いた皆様と家族の支えがあったお陰です。

小さな町で生れた安来節が全国メジャーとなり全国に六十三支部、民謡界の中でも多くの会員数です。先人の方々の努力の賜物です。

荷物にならぬ...と力強く声高らかに唄われる姿に逆私の方がパワーを貰い、背筋が伸び、もっと頑張らねばと思う次第です。この度、二代目遠藤お直さんが安来節の詩を作り祝福して下さいました。二代目遠藤お直さんとの出会いをさせて頂いたのも絃名人 故野坂亮利先生で沢山の思い出があり、詩に込められた一つ一つの言葉に当時は惚けます。



この詩の様に初心忘れず、気持ちも新たに会員の皆様と共に出会いに感謝しながら安来節の保存、発展に微力ではありますが取り組んで参りたいと思います。今後とも皆様方のご指導ご鞭撻の程、よろしくお願ひ申し上げます。

笑顔で紡ぐ安来節



初村恵美子
(山口支部)

二十数年前、夫が松江に転勤になって、引越したので私も幾度か松江に向向いていました。その折に本場の安来節を見聞きしては、私も習ってみたいと思っていました。その後、何年か過ぎて、福岡で安来節の教室が出来ると友人から聞いてふたつ返事で入会を決めました。私の記憶の中に現地で見た安来節が鮮明に蘇ったからでした。その時はこれも何かの縁かもしれないと感じたのです。安来節は面白可笑しく、テンポの良さに思わず

踊りたくなる魅力があります。最初は踊りだけ練習して、三年目で資格審査を受けたのです。二級を頂いた時は嬉しくて、ずっと続けようと思った原動力でした。それから十二年経ち、その間に絃、唄、銭太鼓も始め、安来節の難しさと奥深さを知りました。しかし諸先生方、先輩の方々がこれまで続けて来られた足跡のわだちを巡りながら前進して行こうと思ひます。

毎年秋に、福岡県古賀市の文化祭では、会員が絃、唄、踊り、銭太鼓を発表して地域の皆さんに喜んでもらっています。その時、入会希望者あり、後日体験して入会する人もいます。そんな人達には永く続けて欲しいと心ひそかに思うのです。これからも笑顔になれる様に、また、笑顔を作れる様に精進するつもりです。最後に山口支部の諸先生方、三代目愛之助先生、一字川先生、諸先生方との出会いに感謝しております。

唄の魂ここにあり



荻原健司
(米子支部)

私が安来節と出会ったのは、中学校の頃でした。それまでは、地域に伝わる伝統芸能「比婆荒神神楽」にしか興味は無く、寝ても覚めても神楽の事ばかりでした。その内に「ああ、僕は神楽に生き、神楽に終わる生涯なのか」とまで思った程です。しかし転機は突然に訪れ、その夏の盆踊りの稽古に興味本意で向かい、幼な心に身に付いていた地踊り唄を口説きながら、一心不乱に踊っていた時に私の師匠である坂口美弥子先生に「僕は唄が好きなんじゃね、一回うちの教室に遊びにおいで」とお誘いを頂き、二度三度お邪魔も致しました。でもその時、私はまだ学生、移動手段も自転車か

父の送迎のどちらかしかなく、稽古へ通うのは困難と感じ、安来節の世界からは離れてしまったのです。それから後は、また神楽の道へ突き進み始めました。その中でも私は、道化役の神様である松尾明神と言う役を演じており、面白可笑しく小話をしてつ地域に伝わる民謡などを織り交ぜながら、会場の笑いを誘っていました。その中で本場の安来節に似ても似つかない安来節を唄っていた所、数年振りに師匠と再会し、「正調を覚えなさい、必ず芸に生きてくるから、いつか教室に遊びにおいで」と再度、お誘いを頂き、教室へ向かい諸先輩方のなつかしい唄、師匠や先輩の弾く絃の響きを聴く内に自分自身の魂に宿っていた安来節に対する思いなどが沸き上がり、みるみる安来節の世界へ引き込まれて行き、現在に至るのであります。今は初の審査も終え、三月にある二度目の審査に向け、稽古に励む今日この頃です。

最後になりましたが、こんな若輩者ですが、一生懸命芸に一層精進致しますので、今後一層のご指導ご鞭撻の程、よろしくお願ひ申し上げます。

安来節保存会 東北支部設置にあたって



清野勝利
(東北支部長)

平成二十七年十一月五日開催されました、安来節保存会理事会に於きまして、安来節保存会東北支部の設置の許可を賜りました。

追憶 若き役所勤めの頃、上司から「君は融通の利かぬ男だね。顔にも表れているよ」と評された。この評価に納得し、人間応用力が必要、心豊かに楽しく生きる必要に気付き、苦心惨澹試みるが、従来からの自分の性格を修正出来ず嘆息しながら、山陰地方旅行中にどじょう堀り踊りを目に自分を変えるのはこれだ、自分が楽しみ、そしてその楽しみを他人様にもお裾分け出来る悟り、毎月一回七年間一度も休まず、仙台から浅草関東支部の若岑師匠の元に、

安来節保存会東北支部設立記念



お稽古を頂きに通いました。(これも融通の利かない一面かな?)それから七年目で踊りを、そして十二年目で銭太鼓の師範に合格させて頂き、現在に至っております。

十二月十三日、松島ホテル壮観にて、東北支部の設立総会を開催し、支部長に選出され、四十名の方々の御来臨を賜り、祝賀会を挙行いたしました。あれから十七年目で東北支部の誕生か、それにしても今日まで安来節保存会の役員の方々、諸先生方、

そして同僚の方々の御指導、御協力を賜った結果だと、随喜の涙を堪えて美酒を含みながら、東北地方での安来節の発展に尽力する事を心に誓いました。

平成28年唄い初め会支部競演結果

- | | |
|----------|--------|
| 安来市長賞 | 神門支部 |
| 安来市議会議長賞 | 本道場 |
| 安来市観光協会賞 | 広島支部 |
| 安来商工会議所賞 | 津山中央支部 |
| BSS山陰放送賞 | 神戸支部 |
| 足立美術館賞 | 境港東支部 |
| 家納喜賞 | 加茂支部 |
| 安来節演芸館賞 | 益田支部 |

(有)仁木三味線

製造・販売/修理 三味線・鼈甲撥・尺八・太鼓

〒240-0022 神奈川県横浜市保土ヶ谷区西久保町197-1

TEL 045(713)4319 FAX 045(741)4796

HP <http://www.syamisen.com/>

支部情報

唄い初め会に参加して



杉之原悦子 (広島支部長)

何年かぶりに唄い初め会に参加した私は、会場が演芸館になって初めて唄の大師範特別出演にドキドキで臨みました。今年、大師範になられた高次春雄さんの唄披露に続き、広島支部が広島中支部、広島西支部と合併して初めての支部競演で唄・福原由美さん、絃・高次春雄さん、鼓・杉之原悦子の三名で気持ちを一つに頑張り、思いもかけず「安来市観光協会長賞」を頂き、嬉しくて夢見心地でございました。応援して下さいました諸先生方並びに各支部の皆様方のお陰と心よりお礼申し上げます。

さて、二月七日に原 淳文先生にお越し頂き、三十三名参加で支部講習を行い、唄、絃、鼓の基礎を中心に熱心にご指導頂き、支部競演で受賞したトロフィーと賞状を入れて記念写真を撮り、三月の審査会、五月の師範昇格審査に向けて努力精進する事を誓い合いました。諸先生方、今後共にご指導の程よろしくお願い申し上げます。



平成28年2月7日



竹内 誠 (鳥取支部長)

昨年十一月十三日に、第三十一回鳥取支部の発表会を鳥取市民会館で実施しました。写真はオープニングの様子です。

安来節と他に色ものとして山陰民謡、歌謡曲等々盛り沢山の内容です。踊りの先生やバンドの皆様、鳥取中支部の皆様にも応援をいただき、五時間くらいの公演を実施する事が出来ました。発表会の目的は、会員の安来節のレベルアップを第一として、安来節で培った技術を生かして「地元、鳥取の民謡を保存、継承したい」との思いもあります。しかし、三十一回続ける事はなかなか思うように行か



ない事も多くあります。近年、入場者数の減少による収入減少、会員数の減少による発表会のレベル低下等々悩ましい事もありますが、安来節はもちろんの事、民謡、歌謡曲すべてを生演奏で続けている事が自慢です。発表会が終わると次年度の発表会に向けた合奏曲の練習です。苦しみと楽しみを入り交えながら練習を重ねます。今年も、十一月二十七日に第三十二回の発表会を開催します。都合の付く方はぜひ応援に来て下さい。

安来節保存会東京支部 創立二十周年記念

国際親善交流 ベトナム・ハノイ・サパ



栃木良水 (東京支部)

はじめに、古今東西 交通手段が動けば、人も動き、文化も広く行き交う。まさに旅は、「力」なりを痛感した親善交流であった。

第一に、人と人との関わり方の歴史に触れる事が出来た事です。言葉も耳では、わからなくても単語を漢字に直せば理解出来る。ベトナム語で「ありがとう」をカムオンと言う、カムは「感」でオンは「恩」で恩を感じるから「ありがとう」また日本語の感謝とハングル語(朝鮮)の「カムサ」も似ている。こうして中国の漢字文化の影響を千年に亘り受けつつも、中国周辺で中国から独立し、独自の文化を築いた事で互いに兄弟のような親近感を感じた。

第二に、ベトナムでの戦争の歴史について、以下アメリカが行った事に限つても、その凄まじさは世界の現代史の「負」の遺産として記録されるべきものだと思う。「アメリカが行った北ベトナムへの爆撃を歴史は北爆と呼ぶ」「米軍の飛行機は十六万回の出撃で二百五十五万トンの爆弾を落とした。第二次世界大戦で全世界に落とされた



少数民族の踊り



プレゼント贈呈



ホテル会場にて参加者全員



世界自然遺産 ホアルー・クルーズ出発点

量より多い莫大な量の爆弾を北ベトナムの一国が受けた。アメリカはベトナムを石器時代に戻すと豪語した。東南アジアの小国ベトナムが超大国アメリカに立ち向かったため「アリとゾウの戦争」と呼ばれたが、勝つたのはアリつまりベトナムだった。「北爆でアメリカ軍の飛行機は四千八百八十一機が撃墜された。その残骸がハノイの軍事歴史博物館の中庭にうず高く積み上げられている」

「かつぽれ」で始まり、②「ばか面踊り」、③生演奏による「どじょう揃い踊り」で会場は笑いに包まれた。ちなみどじょうを知っているかの質問には「知っている」との返事だった。ただ、どじょうは田んぼではなく川にいて、田んぼにはうなぎがいるとの事だった。

第三に、ベトナム特有の楽器について、ベトナム伝統楽器の起源は古いと言われている縦笛、太鼓、十六弦琴、二弦の琴、胡弓に似たダンニ、蛇の皮の三味線等々、しかし、何と言つても中心になるのは、一弦琴で「この世の音には実際の音と幻想の音とがある。一弦琴は幻想の音を出せる。音楽とは魂だ」と奏者のマイ・ヒエンさんは言う。

次に少数民族の方々による①「扇子の踊り」(ザイ族)、②「笛の踊り」(黒モン族)：体力が必要な踊りであり、これが踊れないと奥さんがもたないとの事、③「市場に行こう」(傘の踊り) (花モン族) ④「畑に行こう」(サフォ族) が披露された。②以外は女性が演じ、それぞれ優雅な踊りや飛び跳ねる楽しい踊りであった。一般参加の方をはじめ会場の従業員の皆さんの暖かい応援により、交流会は大変盛り上がった。その後、「どじょう揃い踊り」のアンコールがあり、今一度踊りを披露した。そして「どじょう揃い踊り」のレクチャーを行い、参加者みんなで入り乱れて踊った。楽しい時間はあっという間に過ぎ、少数民族の方々「豆絞り」「ひよっとこ面」「あらえっさくんのぬいぐるみ」をプレゼントし、最後に一般の方々を含めての記念撮影で交流会の幕は閉じた。今回、関西より参加の人から「安来節をやってみたい」との嬉しい声が聞けた事、安来節によって笑顔の輪が出来たなど有意義な旅であったと思ふ。

第五に、十二月十二日、世界で最も美しい棚田十一選に選ばれたベトナム北部のサパへと旅立った。参加者は棚橋支部長を団長に東京支部会員有志九名と関西より一般参加の十一名、プラス添乗員の総勢二十一名。サパへは首都ハノイより高速バスで五時間揺られてようやく到着した。

目を覚まし、窓から雲海の見えすがすがしい朝を迎えた。東京支部会員は、交流の前に一時間あまりリハーサルを行い、交流会場へと向かった。舞踏交流会は、まず東京支部会員メンバーの①

◆ 会員の声 ◆ 「もっと知りたい どうしよう掬い」

安来節の歴史に思う



岩佐勝雄
(本部道場)

安来節の殿堂、安来節演芸館には、安来節のルーツを紹介するコーナーがありますが、先人の貢献された安来節発展の歴史を見ますと、そこには並々ならぬ努力された跡が刻まれています。

弟子を集うのも、師匠が何度も何度も足を運んで安来節を勧めるなど、努力されて今日の発展につながっているものと思われま。

安来節保存会は全国に広がり、今では会員相互の絆も、保存会組織の拡充により益々強まって、毎年正月十日の唄い初め、また八月に開催される全国大会等、全国から集う会員は、お互いに技量の向上を願い、ことに沢山の出会いの広がり安来節を愛する人の大きな魅力にもつながっています。

この安来節も昭和の初期頃には子供達には俗歌と言って、唄うと叱られる時代もあったと聞いていますが、今では幼児から中学生まで、また高校生では、卒業前に郷土芸能の習得のための銭太鼓等、時代の流れを強く感じます。さらに安来節は安来市無形民俗文化財として指定されるなど、文化的な価値が一層高まり、益々発展していく事と思いますが、安来節の基本的なもの、個々の芸として、見る人、聴く人に楽しみや感動を与える事には、技量を磨き精進する事ではないかと思えます。

私見ではありますが、これからの安来節保存会のあり方について、上位昇格者の身に付けておられる紋付袴、留袖姿に見られるように、上品さと安来節の品格を形として現しています。舞台に出演される姿についても、永年積み重ねられた風格は、安来節の真髄とも言えると思えます。また感動を与える唄、三味の音色や鼓の響き、そして伴奏と共にユーモラスな踊りや銭太鼓を含め、礼に始まり礼に終わる姿は、見る人に不快を与えない所作も必要と思えます。襟元を揃え、品位のある姿で、見る人の厳しい視線を感じながらも一瞬ともいえる舞台出演は、沢山の稽古を積んだ技量と風格から見る人に感動を与えるのではないかと思えます。

プロの芸人の目標は、「ひびき」される「惹かれる」に始まり、その上は「心を打つ」、そして究極は「魂に響く」ような芸と聞いていますが、よい出会いが第一印象なら、終わった時の「また見たい」、「また聴きたい」という第二印象が残るような、上限のない芸の道を追求する事にあると思えます。テレビ等に華やかに出演する芸人も、辛い下積み生活を経て、今の姿があると思えますが、アルバイトをしながら芸を一生懸命磨く姿があればこそ、人の心をつかむ芸となるのではないかと思えます。

終わりになりますが、安来節保存会の会員数が高齢化と共に減少傾向にある中で、一人でも多くの次世代の会員を確保する事が保存会に対する恩返しではないかと思っています。私も先人の努力された歴史に少しでも学ぶ事が出来たらと心から思うこの頃です。

…高山雅市さんのこと①



審査員
渡部孝夫
(本部道場)

高山雅市さんの手元資料を読み直してみると、安来節の芸を高めるために一生を尽くし芸の改良を目指した道が見えます。人知れず取り組みをしてきた巨匠の功績をいま、安来節のため改めて見つめる必要を感じます。

◆高山さんとの出会い

わたしは子供の頃なにか好きだと、はっきりと思ったこともなかったのですが、昭和二十六年の夏祭りでした。五条家芸能社(出雲市平田)一行が宍道町(現松江市宍道町)小学校講堂の舞台で演芸をしました。安来節をはじめいろいろな色物もあつたと思えますが、はつきり記憶によみがえってくるのは高山雅市夫婦の漫才です。吉本興業や木馬館をはじめ巡業経験で培われた芸に

私は感動しました。舞台上で一生懸命その芸を演ずる姿をみて、私も舞台に立ちたいなとその時ちよつと思いました。

これが最初に見た高山夫婦でしたが、その後私も行ったことがある宍道の散髪屋へ高山さんはよく泊まっていたと聞きました。この散髪屋は安来節保存会に大きな功績を残した新田松次郎さん(三味線、大正琴など多才の芸で活躍した人)の店です。若いころの写真を見ると高山さんは美男子です。それが舞台で鍛えられ顔にしわも増えて次々変化する誰もまねのできない豊かな表情を見せていました。

昭和三十八年九月松江市立病院が患者慰問をするというのでどうしよう掬いの道具を近くの高山さん宅へ借りに行きました。夫人の保子さん(唄名人高山保子師)が「どうぞ、どうぞ」と言ってお茶などすべてを貸せてもらいました。

お礼をもってこれを返しに行ったところ「えんやな、こげなもの、もらわれせんぞ」と言ってお礼を返されました。

奥の仏壇を見たら線香が立っていて、そのわけを聞きましたら「二月に死んでしまつた」といふ。それでは出直しますと言つて、今度はご仏前にお礼を書き直していきました。ご主人が亡くなつたのを知らずに伺つたのですが、気が付いたら喜んで貸せてくれた高山保子さんに私はありがたく思つたことをいまでも忘れていません。

安来節演芸館 入口のザルの話



渡部 二郎
(松江支部)

安来節の殿堂と言われる安来節演芸館が開館して十年になります。色々な行事が行われていきます。保存会会員による演芸もほぼ毎日行われ私も毎度出演させてもらっています。

ところでこの演芸館に来る度に気になっていた事がありました。それは入口右側のやぐらに取り付けてある大きな竹製のザルの事です。博多座公演の時に作られた物だと聞いています。そして開館と同時に取り付けられ、十年間風雨にさらされ、痛みが進み、穴が開き、変形して格好悪い状態になつていました。何とか出来ないものだろうかと思いつき、「よし、私が新しく作つて、取り換えよう」と思い、事務局に相談し、了解を得てから作り始めました。去年の十月末完成、十一月九日納品、運搬するクレイン付き四トントラックでも荷台からはみ出す品物で通行車輛の少ない早朝に出発し、現地到着七時、早速クレインで古いザルを取り外し、新しいザルを取り付けて作業終了。当日は大師範以上研修会の日で受講者が次々と来館、ある支部の人が「穴の開いたザルが新しくなり、どうしようが上手に取れる」と言つた。私の他にザルの事を気にしていた人がいたなんて、何とか格好がついて良かったと思つていました。

ところで今ひとつ考えている事があります。どうしようすくいに欠かせない道具であるビク、やぐらに取り付けたザルに似合ったビクを作り、隣に取り付けた事です。近い内にと思っています。はてどんな品物が出来まふことやら。

◆飛び込んだ芸の道

「うかつに過ぎてきた私の半生だけだと思えば長いものです。私が安来節に踏み込んだのは十七の時だから、もうこれで三十五年、イヤー古い込んだものですよ」
(昭和三十三年一月島根新聞)

高山雅市さんは明治三十八年能義郡布部村に二男として生まれ、大正十一年安来節の世界に入る。

昭和初年、初代出雲愛之助さんの媒酌で保子さんと結婚。二人三脚で芸能活動。昭和三十八年二月死去、享年五十八歳、鼓名人。当時保存会に男踊りは階級がなかった。



小学校を卒業するとすぐに布部郵便局の配達夫となつて一日数里の山道を歩くとことになつた。

「小学校の勉強は乙ばかり、唱歌だけは甲でした。学芸会などに引つ張り出されたものです。安来節なんか唄つたりしようものなら大目玉。でも能義つてことは安来節の本場ですよ。おとなの唄はみんな安来節、唄いたくつてしようがない」

どうしよう掬い踊り雑感



高橋 威男
(東北支部)

「テン・テン・テン・テン・ドーンズ」と拍子をとつて踊り出すどうしよう掬い踊り。緊張の第一歩であります。なかなかリズムが合わず速かつたり遅かつたり、リズムを持って何事もテンポ良くアクティブな行動が必要と思われまふ。間一は自身の生活態度を一時立止まり、振り返るメリハリに通じます。そして笑い一様々な笑いがあります。日常生活において最も大切である笑いは人を幸せにします。幼少時のどうしよう掬いを思い出しながら今日も恵まれた仲間達と楽しくお稽古に励んでおります。

配達夫も一年でやめてしまつた雅市さんは頑固おやじから、芸人は河原乞食だ、と言つて叱られ家を飛び出してしまつた。そして当時安来節の大家安部亀太郎さんに師事して唄の修行に入ったのです。

わたしは昭和三十三年布部ではまだ青年団活動が活発で、芝居のメーカーアップ指導助手として布部村の郵便局長古藤さん宅に泊つたことがあります。家の中に川が流れている鍛冶屋さんのお宅でした。

閑話休題、高山さんがこの道に入った動機は配達夫の時、福知山の平尾興業社が安来節の芸人を募集しておつて家族のものに内緒で飛び込んだのです。

やつぱり五反百姓の次男は居場所がないからなとそんな気持ちもあつたのか。わけでもやましかつた祖母からは安来節を口ずさんでいたら、「お前のような奴はろくなものになりやしない」と叱られていたので、「今でも時々ろくなものになつていないかな」と考えこむことがあるんです」

「やかましかつたけどいいばあさんでした。がね、十年前に亡くなりました」

「芸能社に入ることはもちろん家族が大反対することはわかってきているので、無断でこつそり普段着と風呂敷包みぐらいで出かけました。この時の心は悲しくて悲壮でした。文字通り裸一貫。自分の道を進むしか後はありませんでした。今考えれば全く無茶をしたものです」

(つづく)

います。もともと音感やリズム感が悪くご指導頂いたことは直ぐ忘れてしまひます。又後期高齢の域に入り体力的にも耐久力の減退を強く感ずるようになってきました。特に踊りで大切なことは出だしの一歩、リズム、間、表情(笑い)と言われています。

それは、私の後期高齢生活の指針としても、相通するご教示頂いているようにも思われまふ。それは踊り出しの第一歩、喜寿を迎え第三の人生さらに今後どう生きるか?を熟慮選択し踏み出す第一歩であります。次にリズム感、暮らの中にリズムを持って何事もテンポ良くアクティブな行動が必要と思われまふ。間一は自身の生活態度を一時立止まり、振り返るメリハリに通じます。そして笑い一様々な笑いがあります。日常生活において最も大切である笑いは人を幸せにします。幼少時のどうしよう掬いを思い出しながら今日も恵まれた仲間達と楽しくお稽古に励んでおります。